

報



會

日本山岳会

220

1962年4月

六十年の隔たり

—読書余録—

島田 巽

この早春、人なみに流感にやられて、めずらしく三日ばかり休んでしまった。こういう時とばかりに、あれこれと本を読んで過した、いつもあくせく働いているとアツという間に去ってしまう一日が、びっくりするほど長く、読書もかなりはかどる。ふだんムダにしている時間が、急に惜しくなってくるほどだった。といっても、床の中でとかく手が出るのは山の本である。氷雪の中で苦斗した記録を、暖い寝床の中で読んで、まことに著者に申し訳ない話だが、どうも病人にとっては苦い薬よりも遙かに効き目があることは確かなようだ。

—慧海伝のこと—

読み残していた山の本の数冊が、私にとって即効薬となってくれたのだが、そのなかに、昨春刊行されたときに求めたままになっていた「河口慧海——日本最初のチベット入国者」があった。慧海師のヒマラヤ越えチベット入りについては、すでに「西藏旅行記」上下二冊があるし、本会の小集會

(昭和三十年二月二十四日)でも、多田等観さんから慧海師追悼の興味深いお話を伺ってもいるので、河口正氏の慧海師は、私たちにとって何か身近かに感じられるものであった。身近かとはいっても、この求道者の超人的な努力については、ただ驚嘆するばかりであったが、この本につづいて手にした最近のヒマラヤ遠征の本など、とくらべて、不思議なほど、いろいろな意味で対照的なことが、私などにはとくに興味深かった。

慧海師の第一回チベット入りは明治三十三年(一九〇〇年)のことだから六十二年前のことになる。私が生れる前だったには違いないが、といって「神話時代」の話というほどではない。試みにメーソンの「ヒマラヤ」に当たってその年譜を見ると、一年前の一八九九年には、フレッシニフィールドのあの有名なカンチェンジュンガ偵察が行なわれているし、一八九八年には、ブルースのヌン・クン山群探検、一八九五年にはアンマリーのナンガ・パルバット試登が記録されている。こういう同時代

的な背景から見ても、慧海師の身ドウラギリ附近越えてのチベット入りは、やはり相当に特異なものを持っているといつてよい。インドの支配者であった英国人の場合とは違って、あくまで潜行を余儀なくされた慧海師にとっては、あの筆舌につくせぬ苦難を乗り越えるよりほかに手はなかったわけである。そして、単独で露営用具もなしにドウラギリ近傍の高所を越えるという破天荒なヒマラヤ越えをやり遂げたのには、やはり宗教的な強い決意があった点を無視するわけにはいかない。行路に迷って「断事観三昧」に入り、無我のうちに暗示を得て、事を左右いずれかに決するといった行き方は、慧海師独特のものというほかはない。

この六十余年前の慧海師とヒマラヤの関係は、同時代のフレッシニフィールドやブルースのヒマラヤ観に比べても相当に異っているに違いないが、それだけに今日の日本の登山家たちのヒマラヤの関係に比べて見ると、その間には想像を絶した隔りがあるのに驚かされる。広大なヒマラヤのことであるから、今日でも、どこか山中の一角に苦行僧などが分け入っているかも知れないが、少なくとも、慧海師ばりの荒い修行を志しているもの、果たして今日の遠

も、近年ヒマラヤへ出かけて行く日本の遠征隊などと比べると、慧海師の破天荒な冒険が、わずかに六十余年のことだとは思えないほどの甚しい隔りを痛感させられる。

その隔りは、よい意味では、今日の登山家たちがヒマラヤをいわば一種の「ブレイグラウンド」とみなして、その広大なスケールにも幻惑されず、余裕をもってその高峯に挑むに到っている点からも生じているといえよう。羅針盤を備えなかったころの航海と現代の航海との差に近いものが、そこにはある。ヒマラヤ遠征にも、マロリーなどが極度にきらった大遠征隊が持つぎこちなさが、次第に消えていって、今や山登りのための山登りさえ楽しめる時代が訪れて来た。その自由さ、その楽しさが、このごろの日本ヒマラヤ遠征記録にも、かなり豊富に見出されるようになった。それだけに慧海伝を読んだ私には、六十年という時間的な差だけからは考えられないほどの激しい隔りを見出して、不思議きわまりない気がしてならないのである。

これだけ時代そのものに進展があったのだとすれば、慧海師が身を挺してチベット訳仏典を求めにラッサへと赴いた情熱に匹敵するほどのものが、果たして今日の遠

征隊員の胸中に存するかどうか、その点も逆に考えて見なければならぬ問題のように思われる。六十一年の歳月が、ただ装備と技術と資金などの面にのみ、格段の相違を生み出したというのでは、文明史の上での進歩の記録とは言えないのではないか。この雪にまみれ、血にまみれてチベットへたどりついた先覚の姿を、あれは登山でもエクスペディションでもない片付けてしまつて、見向きもしないようでは、次々とバトンを渡して行く上で、足らぬものが出てこよう。

その点では川喜田二郎氏などがネパール西北部を探索した折に、慧海師の足跡をだどり、同師の觀察的確さに改めて敬意を表していることは私たちの心づく感じることなのである。



— G・W・ヤングのこと —

慧海伝と最近のヒマラヤ遠征報告とを読みくらべて、妙に私が考へこんでしまったのは以上の通りであるが、もう一つ私は強く打たれる文章に、やはり病床で出くわしたのであった、それは、すでに

故人となった名登山家 G・W・ヤングに關連するものである。たまたま一九六〇—六一年版の「The Mountain World」が届けられていたので、その本のなかのすばらしい写真を楽しむ暇めたり、あちこち拾ひ読みをしたのだが、こんどの巻頭論文に掲げられているアーノルド・ラン翁の G・W・ヤング評伝を読み出したら、遂に終りまで一気に読まされてしまった。

この年報の一九五五年版には、ヤング自身が「勇氣と山の文章」と題する一文を寄せて、近年の登山家の文章に鋭い批判を浴びせたのであったが、その後、五八年（昭和三十三年）九月六日、八十一才をもって、その生涯を閉じたのであった。長い親交のあったランの評伝は、かがやかしい一時期を画した登山家であるとともに、すぐれた文章家であり、詩人でもあったヤングについて、実に暖い友情と深い惜別の情とに満ちているものであった。

なかでもとくに私を感動させたのは、英国山岳会創立百年を記念する行事の一つとして、五十七年十二月に行なわれたヤングの講演のことである。A・C 百年祭の記念晩餐会には、その五十年祭にも出席した八十を越える老会員が八人顔を見せ、ヤングもロングスタツ

フなどとともに、その中の一人であったことが、松方さんの「A・C 百年祭に出席して」（会報一九六号）のなかに記されている A・C のヤング翁の講演はランによると、実にすばらしいものであったという。もともとアーティフィシャル・クライミングを極度にきらって、ピトン一本を見つけてもご機嫌ななめだったというほど徹底していた人だけに、この講演のなかにも、技術万能の時代に対する痛烈な批判がふくまれていたのは、当然のことかも知れない。エヴェレスト遠征にも参加したことがあるという若い一人が、エヴェレスト遠征のような前時代の名残りに一役買うよりも、新時代を予告する人工衛星の打上げなどに参加したい、と述べたことを例に挙げて、ヤング翁は山登りの何たるかを解しない言葉だとして、その見当違いをさとっている。

この講演の結びは、こういう批判よりも、もっと次元の高いヤング的な崇高な言葉をもって山への態度を述べているものだが、それが特に印象深くランによって引用されているもう一つの理由、——実は重要な理由だがそれはこの晩の A・C の講演が G・W・ヤングにとって最後のものであり、山と A・C に対する彼の決別の辞であ

ったかも知れないという点である。実はこの当時ヤングはガンに冒され、すでに絶望状態に入っていたのだが、御本人には秘されていた。その病状をすでに医師から通告されていたヤング夫人は、A・C の最後の一夜を心おきなく楽しませるために、夫君をこの講演へ送り出したということである。もう二度とは繰返されることのないこの出席を、老友ランは感慨深く眺め、その翌日すばらしい講演に感動させられた旨を病院のヤングへ書き送り、さらに数カ月後に見舞いに赴いたことを記している。それから、二、三日してヤングの逝去となったのだが、この高名な二人の老登山家の A・C を中心とする生涯の最後に到るまでの交りは、感動なしにはいられなかった。

同じ「マウンテン・ワールド」のなかには、一九六〇年度のスイス隊によるドウラギリ初登頂の簡単な報告が掲げられている。ピトン一本をささへ嫌悪したヤング翁の語を読んだあとで、この報告を読んだのも、皮肉な対照であった。というのは、このスイス隊は、ポーターによるカトマンヅからの荷物輸送のキャラバンをやめて自家用飛行機による輸送にたよった上、登路偵察にもこれを使うとい

う、徹底したスイスの合理主義を実行に移した点に特色があったからである。この飛行機使用にはいろいろと故障も出たが、ともかくスイス隊は、登頂に成功し自己の計画が正しかったことを力説しているのである。ヤング翁が存命だったら、このような遠征を何と評するだろうか、実は想像して見たくもなかったのである。

妙なこじつけかも知れないが、ヤングが A・C に入会したのが一九〇〇年とすると、このスイス隊の成功との間に六十一年の開きがある。山登りの世界にも、半世紀余を経ると、やはり大きな変化が生じると好むと好まざるとにかかわらず生じるものである。

ふと気がつく、慧海師がドウラギリのあたりで血を吐く苦斗をつづけたのが一九〇〇年、スイス隊が空路の補給で、この八一七二メートルの処女峯に足跡を印する六十一年のことだったわけだ。強いて因縁をもち出すつもりはないが、否応なしに移り変つて行く山登りに、なきヤングが氣にしていた精神だけは、山の世界に受けつがれて行くことを、心から望みたい氣がするのである。

お願い
会のルム・山莊資金の募金にご協力下さい。

高所医学シンポジウムに出席して

辰 沼 広 吉

会期 六二年一月四日～七日
 会場 ダージリン・マウンテン
 ニアリング・インスチ
 チット

年末もせまるころ印度国防省から手紙が来た。その内容は「高所医学に関する研究会を開催するから出席願いたい」との趣旨であった。

実は旧年中、高所での二、三の医学的問題に関する解答をしたことがあったのが発端であった。こんな行きがかり上、出席しないわけにもゆかないので、研究会の内容は全く不明であったが、とにかく時間一杯に会場である、ダーズリンに着いた。

案外に寒いので驚いたが、もっとも高所医学の研究会だからしかたあるまい。軍人の会合であるからであろうが時間通りにすらすらと運んでゆくのは気持が良いが、昔の日本の軍隊が思い出され、再び軍人になったような気がした。ネールのメッセージの中に、今や宇宙時代と呼ばれるこの時にもっとも適した研究会である、と述

べられていた。

× 初日は Gen, Bhaita にゆつて、型の如くこの会合の趣旨が述べられた。

次いでメノンがやって来て、彼一流のユーモアをもって高所医学の必要性を話した。印度の学会は二時間毎に休憩となり雑談が始まるから極めて面白い。

次に Prof. J. B. S. Haldane 教授が寒さに対する馴化、General B. M. Pao が高所の生理学的、心理学的一般概論の話があつて、初日は終った。

× 第二日目から本論というわけであるが、カルカッタの Dr. H. Saha 教授はインドの登山隊の呼吸の問題を取り扱って、テンジーンも被験者として実験されている。そして高所適性の問題をとり扱っているらしく、平地に於ける適性検査の方法についての興味を持ち、その困難性について語った。同じくカルカッタの若い助教授で S. Lahiri は Hilary の Himat

ayan Scientific Expedition に同行した医師で Ama Dablam 19,000 feet に「カマゴコ型の大型実験室を運び上げ、十ヶ月間、実験を行ったそのおりの呼吸に関する報告があつた。

実験室を實際に山へ持ち上げたと言うことに關しては、相当の経費と努力が払われたことと思うが、その成果の全貌はまだ報告されなかった。

Delhi 大学の学部長 Dr. R. Vishwanthan は、航空関係の体温の問題と急性馴化の問題を実験的にとり上げていた。

午後は登山の食料、衣服等に関する報告並に Brig. Gyan Singh の衣服、装備のデモンストレーションが行われ、日本の物品も紹介された。

× 第三日目は、ゲストの講演というこで、私の Medical and Physiological Study at a high altitude 及び英国の Medical Research Council U. K. の J. S. Millie の呼吸に関する呼吸のガス分析が報告された。後者については英国の伝統的な呼吸の仕事で価値あるものであった。フランスはカルカッタ大使を通じて図書その他の寄贈があつた。ソコットは Gippeneiter 及

び Kirill Kurumin の二名が講演を行ったが、酸素補給器は使わないらしい。この会に宇宙船の置物と図書の寄贈及びバッジを Gyan Singh に送った。

× スイスの Muralt 教授及び Paul Bauer の出席が予定されていたので、ぜひ逢いたかったが、年長のため自愛したのか、Messege に止まったのは残念であった。

× 以上会期を通じて航空、登山に關する生理学的、心理学的立場から多くの経験者によって報告されたわけであるが、もともと航空と登山とは分けられて然るべきであるが、この学会は、むしろ「異常環境」と言う高次の立場から、そしてさらにインド軍隊という特殊な立場からの必要性があつたのであろう。

× しかし高所に於ける問題を中心に集まった人達の話を大きく分ける、第一は生理学の立場から一つの問題を、一例えば「呼吸」について深く、正確に追求する方法と、第二は「環境衛生」の立場から、人間を総合的に診断する方法のあることが特徴であった。いずれにしても彼等はきわめて熱心に、そして講演を且つ討論することはすばらしい。

高所医学というものの、言葉を換えれば「酸素不足の環境に於ける体の変化に關する研究」は、古来戦争の時代、或いはインド軍隊のように直接登山と直結するような場合きわめて研究者も多く隆盛を極めるものである。

その現われが、この研究会であることはまことに喜ばしい。しかし高い空間にあこがれをもつ学徒が、いつの時代にもいるもので、そしてきわめて地味な歩みをしているのである。スイスのムラルト教授も、その意味でぜひ逢いたかった一人であるが、高齢のためか出席なかったのはかえすがえすも残念であった。その意味でこの研究会の存在を心から願ひ、かくれたる研究者の発見を望むものである。

本号目次

- 六十年の隔り……………一
- 高所医学シンポジウムに出席して……………二
- シャモ二便り……………三
- 剣の窓……………四
- 百瀬慎太郎氏の追憶……………五
- 九重の遭難に思ふ……………六
- 三月の石鏡山……………七
- 山崎春雄氏……………八
- 会員通信……………九
- 図書紹介……………一〇
- 会務報告……………一一
- 現地小集會(宮城支部)……………一二
- 支部便り(越後・東京・熊本・静岡)……………一三
- 長野県山岳協會……………一四
- 新潟県山岳協會……………一五
- 会員の声……………一六

シャモニ便り

近 藤 等

ニの針峰群を見乍らシャモニの町に入り、この町で一番陽光に恵まれたムースーの高地にあるガストン・レビュファの新しい山荘に到着し再会を喜びました。

レビュファの山荘からの眺めはシャモニ随一で、夕方モン・ブランのボソン氷河の碧水が夕陽にキラキラ輝き、ドリユの西壁、グランシャルモ、グレボンなどの花崗岩が炎のような色を呈する光景は全く想像以上の素晴らしさです。

出発の折はいろいろ有難うございました。シャモニに来て早くも一ヶ月近く過ぎました。美しい山々と心温く迎えてくれた人々に囲まれて楽しい日を送っております。

空港にエドワード・フレンド氏の迎えを受け、車に荷物をすっかり積み込んでジュネーブの美しい町に入りました。右側通行が初めての私は少々気持がおかしかったですが、すぐにスイス国境を越え、軽井沢附近に似て感じの処を通りシャモニの谷に入りました。ブーシユのスキー場に昼頃到着したところでプロビエ夫人の迎えを受けて一緒に昼食、スキー場の食堂といっても日本のラーメン族と違って、フルコースを皆んな喰べているのには驚きました。右側にモンブランとエギュー・デュ・ミディ、グレボン、グランシャルモと写真で見馴れた美しいシャモ

のですから日本で云えば志賀、赤倉、白馬のホテル級で富める国だと羨ましくなりました。

丁度世界スキー選手権大会開催中で、学校はフランス・スキー連盟の役員の宿舎となっておりましてので大勢の役員達や日本に一九五四年にきたギョーさん達と愉しく過ごし、連日大会の見学に出掛けました。

日本選手は成績の上ではかんばしくありませんでしたが、地元の人達から最大の好意を以って迎えられました。常に微笑をたたえ、どこの国の選手よりも沢山買物をし、S・A・Jのバッジをどの店の売子にもくばったことが原因の様です。

この選手権大会も十九日で終り、谷は再び静けさを取り戻し、私もまたレビュファの山荘に帰り、二十日から三月三日まで国立スキー学校のクラブ・インストラクター（日本スキー連盟の指導員に当るものでプロではなく、アマチュアの指導者を養成して資格を与えるコース）の講習に参加しました。

私は日本でも決してオーストリア的な滑り方をしている積りはなかったのですが、フランスの連中と滑ってみるとオーストリア的な姿勢が出てくるらしく訂正をされました。

フランスのコーチは技術が正確

山崎安治著

剣の窓

日 高 信 六 郎

さきに「穂高星夜」をあらわして、穂高の早期登山史をわれらに示した著者は（会報第一九八・一九九号図書紹介欄参照）本書によつて

（一）剣岳の早期登山者についての詳細な史実を展開してくれた。初登山者を推定したのち、明治四十年柴崎測量官の長次郎谷登山から大正六年冠冠の早月尾根登山までの登山者について、山岳の記事の外

だろ。 （二）登山史上の人々の章では小島鳥水、高頭仁兵衛、木暮理太郎、ウエストン、辻村伊助、板倉勝宜、大島亮吉の諸氏について、詳しい山歴を記し、鳥水については「かれが得意の文筆を縦横にふるって登山の普及にはたした役割り、登山技術の紹介、ウエストンはじめ、日本の高山深谷を跋渉した外人の紹介などは、日本における近代登山の育成にどのくらい与つて力があつたか、はかり知れないものがある」といい、高頭の特異な山歴を記し、その日本山嶽志編さんの苦労と功績をたたえ、木暮については「不屈にたて剛健實実の精神は翁の生涯をつらぬくのだが、それが翁の登山にも独特の風格を与えた。山に対する熱情、経験、教養、そのいづれにおいても翁は一世の大先輩にふさわしい存在であつた」という松方三郎氏の語を援用し、「日本における近代登山の開祖であり、日本人よりもはるかによく日本の山を理解し、終生これを熱愛してやまなかったウエストンの業績は、日本の山に登る誰れしも深く心にとめておかななくてはなるまい」と記し、辻村は「日本在来の金剛杖とわらじにかわる、氷河の山を対象とした登山というものを、直接まごとな文章と写真によつて、日本にもたすそのきつかけを作ってくれた」ことを特記し、板倉の悲痛な最後を記述したのち、かれの遺稿集

まで調べて正確を期している。 （三）本邦における登山技術の変遷序説に於ても、文書記録によつて、明治以前、日本山岳会設立まで、設立前後、探検時代とスキー術の渡来、山岳スキーの普及の各項に分けて装備と技術の点から歴史的考察を加え、ウエストン、志賀重昂、高頭仁兵衛、小島鳥水、植有恒等の先蹤者たちの行動や著者の影響を論じ、登山術の発展をあとづけている。初期に於ける地質学者や陸地測量部員の功績を記してあるが、当時における植物学者の貢献についての記述がないのは物足らぬ気がする。白井光太郎博士などの事蹟を調べてみると面白い

であると同時に実に強いのに感心しました。基本技術とその教え方に重点がおかれた講習ですが、一日始めと終りに必ずケーブルの頂上から標高差一〇〇〇〜一五〇〇米をわざとコースをはずして深雪、ベタ雪、板状雪と処かまわす

とばして滑降をするのですが、この時でも両スキーはびったりとバラレルにした儘でとばさなくてはならないので、私は骨折でもしたら大変だし、かと云って云われる通りにしないと、他のフランス人の講習生はガンガン説教されているので、私も覚悟をきめてとばしましたが、おかげさまで一昨日無事講習を終りました。

最後の二日は試験で先づその前にスラロームをやり、教師が滑ったタイム四十％加算して、これ以内で滑らないと試験を受ける資格が無くなるわけです。私は生れて初めてスラロームなるものをやらされたので、後になってみて少々慎重に滑りすぎた感がありました。このスラロームで二十六名のインストラクター候補中六名が失格しました。

試験には実技の外に学科（スキー理論、雪と雪崩、救助法等）と指導法があるのですが、私は後の二つを翌シーズンに受けることにしました。

この間シヤモニではモリス・

エルゾグ氏を始め私が訳した山とスキーの本の著者達が世界スキー選手権大会を中心に多勢集まり、私共夫妻を大歓迎してくれましたが酒類の一滴も飲めない私はこの事だけはすっかり困りました。

七日にバリーに行つて大学の手続を済ませ十五日にエドワード・フレンド氏の招待でエックス・レバンに参り、それからアンリ・オレイエに呼ばれて月末まで、バール・ディゼルでスキーを愉しみ、四月上旬シヤモニに戻つてエギュー・デュ・ミディ（三八四二米）のてっぺんからシヤモニの谷まで続くヴァレ・ブランシュ（ラシユナルがクレバスに落ちて死んだ）の大滑降をフランコさんと

やつてからバリーに引き上げて腰を落付けて本職の勉強をするつもりです。

おかげで私は国立登山スキー学校のスキーと山に関する凡ゆる講習に参加してよいとの申出を文部省スポーツ局長であるモリス・エルゾグ氏とフランコ校長から受けましたので精々山とスキーも勉強します。夏山のガイドの講習は六月十日から始まります。遭難救助の講習にも出てみたいと思っています。私にこうした特別の計らいが与えられたのも凡て日本山岳会というバックがあるおかげで深く感謝しています。

最後にルーフレヴエ氏からの御願ひ。彼は版面を集めておりますが、モン・ブランに登った最初の女性で「緑の手帳」というのを書き残したアンリエット・ダンゲルの珍らしい自筆の版面を戦前日本の偉い方（秩父宮？）が買いになり、日本に持ち帰られ

た筈だとシヤモニの前町長ポール・パイヨ氏が申しましたが、レビュファはこれを手に入れたくてたまらないようです。もし日本山岳会の方で、それをフランスで買った方がおられ、手放してもよいとおっしゃるならば是非譲つていただき度いと申しておりますので会報にこの旨をおだしいただければ幸いです。

リオネル・テレイはジャヌーへ行くためにバリーに上京したが、私とすれ違ひで会えませんでした。彼の新著はなかなか読みごたえがあります。

（三、五・折井健一あて）

東京支部主催 山の講演と映画の会

—ヒマラヤの夕（予定）—
○期日六月十三日（水）
午後五時半開場・六時上映
○場所虎の門共済会館講堂
○本会の収益を以てルーム基金の一助としたいと思いますから、お誘い合せの上多数ご来場をお待ちします。

「山と雪の日記」に複雑な内容を持ち、端的な、鋭い、そして如何にも暗示に富んだ内容がもたらしている」ことを指摘し大島の「山に生き、山に逝つたその生涯はまことに多彩なものであった。あるときは荒寥とした山頂に、あるときは静かな森林や晴れた高原に、自らの新しい世界を創り上げていった、たぐいまれな優れた登山者の一人であった」と評している。

初期の「リュックサック」に関するノートと、尾根と壁の記録の二章では、早大山岳会と其他の山岳部報によつて創期北アルプス登山の記録をしらべ登山史について「最も重要なことは、その基礎となる確実な資料を集めることである。必要と思われる登山記録の重要なものを正確に求めることは、なかなか骨の折れる仕事である。いかげんなことでもごまかすなどということはもとより許されない」という著者の態度は本書を貫いており、若い登山者に対して先人苦心のあとを軽視せぬよう随所に警告しているのは大いに同感されるところである。

山二題では六十八年ぶりに氷河の末端から白骨となつて散見された不世出の単独登攀者ウインクラート「氷の断層」の創作舞踊を発表した藤蔭静枝についての感想と、欧米最近の登山界における動向を紹介し、次で「現代欧州の登山界はマッターホルンの初登頂をもつて幕を閉じたアルプスのゴール

デン・エイジに付いたシルバー・エイジ、さらに困難な岩壁登攀が行われたアイアン・エイジにつづいて、アーティフィシアル・クライムを縦横に取り入れたビトン・エイジに入っている。これがアメリカではさらに大規模になつて、エンジニアリング・クライミング、要するに機械化登山にまで来ている」ことを述べ「山登りはけつして機械化登山いつてんばりに集中してしまふわけのものではあるまい。

要は自分自身の山登りを見出すことが一番大切なのである。人にめいわくを及ぼさない限り、どのような山登りをやろうと、それは登山者個人の好み問題であり、かえりみて他をあげつらう必要は少しもあるまい。自分でつけた山登りも、自分自身で大切にそだてることである。ただその山登りが、人からの借りものであったり、たんなる物真似であつたりしたら大変危険である。これだけは避けてはならない」と結んでいるのは首肯される。

著者が今日まれに見る熱意と努力を傾けて登山史の研究に当り、次々に著作を著わされるのは、まさに心づよいことである。さらに深く、さらに広くその研究をつづけて、その成果を示されることを期待して止まない。

昭和三十七年一月、二玄社発行、二八三頁、写真八葉、四八〇円



＜対山館＞ 日本の「ホテル・モンテローザ」と言われた「対山館」のこの建物（写真）は、明治22年大町の大火の翌23年に建てられたもので、昭和18年7月、第二次大戦のため惜しくも業を閉じた。本稿の百瀬慎太郎氏は、その三代目の当主。一大町市・百瀬美江氏提供一

百瀬慎太郎氏のこと

冠 松次郎

私が大町の対山館を知ったのは、明治四十四年であった。松本からガタ馬車で四ツ谷の方へ行く途中立寄って中食をとった。帳場には白髪の老人がいてしきりにソロバンをはじいていた。それは慎太郎さんの父君で、土間で世話をやいていたのが、今考えると慎太郎君であった。

大正四年に立山の方から針の木越えをした時には対山館に泊った。旅服を脱いで湯殿へ入ると、先に入っていた学生らしい上背のある若い人がいて、初面識なのに顔を見合おうとすぐに山の話を始めた。この人が石川欣一さんで、慎太郎さんと二人で今日剣岳から帰って来たばかりだといった。私はすぐそのあとで登ったらしく、二十二番

目だと石川さんが話された。

それから私は北アルプスや黒部を訪ねるたびに大町に腰を下ろした。親切な居心地のよい家だった。慎太郎さんも酒が好きだったし、私も好きだったのでよく話が合い、泊るたびに山を眺めながら晩酌をともにした。

昭和五年の秋、鹿島槍岳から黒部の紅葉を見て、上流を針の木越えをして大町に帰った。このときには岩永信雄さんが一緒にあった。二階の広い座敷に通されて夕餉の膳につこうとすると階子段の音をさせて慎太郎さんが上って来た。手に徳利をもつて。

それから暮れて行く爺岳や鹿島槍岳の新しい雪の姿を眺めながら晩酌に時のたつのを忘れた。今でも時々思い出しては大町を想う。

私は慎太郎さんから大町近くの山の話をよく聞いた。後立山のことを大町では西山といっていること、鹿島槍の南と北の峯が

同じように空に向かって尖頂を競っているの、背比といっていること、それから大町から麓川谷の左の方に見える尖った山を私は七倉岳だと思っていたが、それは北葛岳で、その奥の方にあるのが七倉岳と言うのだと教えられた。

高瀬の支流千丈沢が千丁沢であること、棒小屋沢の支流の鹿島槍の頂から出ている沢を、私はヤリ沢と名づけようとしたら、あれはコヤウラ沢だと言って訂正された。この沢の出合には猟師が小屋がけをする処で、そこでその後、牧の小林喜作（喜作新道を拓いた人）が息子や犬とともにナダレにつかれて死んだ。また山の名や谷の名で度々注意をうけた。

私が対山館へ泊った頃、サインを求められたまだ女学生であった娘さんが、いま慎太郎氏の遺業をつぎ、針の木峠の小屋や大沢の小屋を経営している。黒部にダムが出来、大町からトンネルで黒部へ入るようになる、大沢の小屋はダメになるし、針の木峠の小屋も利用者が少なくなるというので心配していられた。役に立たない私ではあるが多少の尽力をして見た。水力電気の方で黒部の山湖の周辺にでもヒュッテを建てさせればと思ったからだ。

慎太郎氏はなかなかよい歌をよまれた。

先頃、長野のある人から歌集をだしたいという話を承わった。私はそれが出版されるのを楽しみにしている。

追憶と言うものは、なつかしいような淋しいものである。何か人生の深みにさわるような気がする。

× × × (三七、三、一四)

百瀬慎太郎

山を失う

横内 斎

独眼龍百瀬慎太郎氏と言えは山岳会の古い会員（註一）で、大町の対山館主とし、また親切な山岳人の友として、北アの北部を訪れた人は誰でも知っているなつかしい人だった。この人も終戦後まもなく亡くなってしまった。だんだん忘れられてゆくが、大町周辺の案内人を育てて、名ガイドの幾人かを作ったのもこの人に負うところが大きい。

明治の終りから大正年代にかけ、わが国の登山がようやく体系をととのえる時代に生きた、山を愛すること深い人だった。自己の経営した針の木峠のふもとの大沢小屋の前の巨岩の中に、記念の碑（註二）が残されている。

百瀬慎太郎氏は、大町の名家（註三）の出て、旅館対山館を経営していた。早くから北アルプスの開発に志し、ことに後立山連峯に関しては、どこかの岩この小谷もそらんじて登山者に対してくれた。山案内人を養成することが厳であったので、大町のガイドは品格があり、客に対して親切で山をよく知り、植物なども誰もが数十種は知っていたので、他の地方の案内人に比して、山行者の間には名評が高かった。

氏のニックネームは独眼龍と言ったが、本人や家人は知るや知らずや、いつもにこやかに客を迎えていた。これは氏の片眼が不自由で、それに古の名将仙台の伊達政宗

のような風格があったからである。

対山館は三階建てで入ると長い横土間があり、腰掛けられるようになっており、正面右側に大きな高い階段があつて二階三階に上がるようになっていた。女中さんや家人が客の応待にたえず立ったり坐ったりしている。幾組かの早立ちの客が大きな荷を負つて山に向つて立って行つた。こんな中に帳場に坐つていた氏は、山行の相談をする

と立って来て桐で作つた硯箱を下げてくる。これは相当かさばつたもので、下の方は小引出しが二つほどついており、上のあげふたをとると硯箱になっている。そして必ず巻紙だつた。



百瀬 慎太郎 氏

客の山行の相談を要領よく聞いて、適当な助言をしてくれる。あそこは危険だから越中側を捲けとか、あそこには水がないとか、その目的と同行者では、そこまでは行きかねるからどこで泊れとか、その間に所用泊数と人数をにらみ合せて、米がいくら味噌が何程、野菜がどう、缶詰が何本、お茶がどのくらいと記して行くのだった。それからそのあと案内や強力に一人一日五匁の割合にハギという刻み煙草を幾日だから何匁と計算し、帰りの車馬賃は客の負担で、富山に出るから直江津をまわると一日では帰れないから、一泊二日の泊り料と人夫賃まで書き添え、これは直人がよいでしょうと、待機しているガイドを呼んで言いつけるのだった。そしてその巻紙を当番の男衆に渡すと忽ち所用品が客の前に集められた。

私は比較的大町に近いので、家を朝早く出て八時頃ここにくると、大方の客は出て行つたあとで、運出の人が立つ頃である。

月たち年を幾年か越して、大東亜戦もたけなわになった頃である。たしか昭和十八年の五月だつたと思う。さすがにいかな山好きも登らなくなった頃だ。軍の要請によつて私の恩師小泉秀雄先生は、その奉職先である共立女子薬学専門学校の校長長田捷二薬学博士と他に二人の教授を伴つて、北ア山麓にサンカヨウとシラネアオイの産出状態を調べに來られた。これは医薬品が不足してきたので、軍からこれらの薬効を調べて欲しいと半ば命令的に言ってきたので、はるばるとここにやってきましたわけた。私はこの地方を歩いている関係から同行させられたわけである。

この戦争の真只中に、神城や四谷で、兩植物の産出状態をしらべ、それ入手する準備をととのえて、はるばると二股から白馬尻まで遊んだ。誰も登らない春浅い白馬は、清浄そのもので、雪崩のデブリが波濤

のようにつづいてた。途中トガクシシヨウマとサイハイランの花が美しくかしきびしく咲いていた。

引返し夕方もう暗くなった頃、対山館の客となった。百瀬氏は喜んで迎えてくれ、私どもは何はなくともまあ一杯ということにした。夕食後各自部屋へ引取つたが、百瀬氏は家人に言いつけて、私の部屋へ酒を運ぶのだった。私は元来この方はからつき駄目なので、氏は手酌でデビリティとやりながら、「山」を失つたいきさつを繰返し話すのだった。

古い日本山岳会々員である氏は、その年報をこよなく愛し、初号からきわめて丁寧に保存していた。何年の何号に誰のどこへ登った記録があるまでそらんじていたわけである。

ところがである。氏の友人だか知人だか忘れてしまつたが、ある日らぶれて氏を訪ね、一旗あげるのに、何でも山岳の記事をまとめるために、ぜひ必要だからと、命の次に大事にしていた「山岳」を借りて東京へ行つてしまつた。無論戦争中の話である。一年たち二年経ても、この愛すべき「山岳」は返つて来ない。氏はいかにも残念そうに、これを繰返し私に向つて話すのだった。十二時になつてもこの話は終らない。私も中頃は眠くて困つたが、氏の真剣な話について引きずりこまれて、同じ話に何度も合つちをうっていた。しかし二時になつた。いかな私もちまりきつてしまつた。何しろ何とか話の結末をつけないといけな

い。そうでないと私は休むことができない。私はようやく考へて、百瀬さんこうしまししょう。私が何とか伝手を求めて「百瀬慎太郎山を失う」という記事を週刊朝日に書いてもらいまししょうと言うと、氏はわが

意を得たとばかりに、ぜひ頼むと言って、ようようおみこしを上げた次第である。

当時は私もこれは実現しなくてはならないながら、あの相次ぐ大本営発表に踊らされて、そんなところではなかった、が心の隅にはこの何とない約束が忘れようとして忘れられずに残つてた。幸いJACの会報に執筆の機を得たので、氏の一面面を語り、山を失う次第を記して、生前の氏に対する遺約をお詫びするわけである。

(註一) 百瀬慎太郎氏は明治二十五年十二月十日生、同四十四年八月本会入会(会員番号二一五)、昭和二十四年三月五日、大町の自宅で永眠五十八才。

(註二) 大沢小屋の記念碑は昭和二十八年八月に建てられた。銅版(縦30×横40cm)に刻まれた碑文は次の通り。

百瀬慎太郎氏を偲ぶ

大沢の小屋の窓辺に命ヶ嶺の

秋ばな色を見つて幾日ぞ

慎太郎

山を想えば 人恋し
人を想えば 山恋し

之は亡き百瀬慎太郎氏の心の奥の表現であらう彼の心の山であった針の木に彼の想いに浮んだ者達が語り合つて彼の愛誦一首を刻みとわに彼を偲ぶがとす

楨 有恒、石川欣一
大町山岳会、外有志

(註三) 百瀬家は町の草分け、家名は代々大町間屋(ハチヤマチヨウ) 百瀬新右衛門を名乗る。慎太郎氏は対山館二代目の当主百瀬金吾の長男。母万世(カズミ)は松本藩典医斎藤氏より嫁す。

九重の遭難

に思ふ

橋本三八



川喜田社太郎

暖国九州の二千米足らずの山で、冬とはいえ七人も遭難死したという報は、全国の人達には何かの間違ひではあるまいかと疑いを持たれたことと思う。地元に住た私でさえ最初耳にした時、「そんな馬鹿な」と本気にはしなかった。はつきり事実と知ったのは一月二日の夕方（遭難は一月一日夜）その頃は一日からの吹雪は此処山荘（標高九〇〇米余）附近で三〇糶を越えてきて遭難の事実はそれによっても有り得ることを示

していた。三日は快晴となったがバスは不通で、無理に頼んだハイヤーで私は八幡出張のため山を降りたが、遭難の詳細は八幡の家で、これも初めて目にする事が出来た。

遭難経過は別に変ったケースというものではなかったが、それに対しての所謂山のベテランとか識者という人達の批評の記事で、これには腹が立った。その向ッ腹を早速新聞に投稿するべく自分の考えを書いたくらいである。

勿論その人達の言う準備の不足はあった。山に対しての認識不足もあった。（彼等も一応テント、寝袋、ラジウス、食料も持っていた。しかし一時間もしれば法華院温泉に下れるという考えを安全と思ってそれに向ったようである）だから遭難したのであるが、戦争裁判でもするように敗者は賊という扱い方はあまり人情がなさ過ぎると思った。

徹底的に批判することが次に進む者への教訓となるという考え方もあろうことは判る。しかし現地状況はどうであったか、何十年来の大雪と地元は言っている。それ以前のことの判らない何十年だから百年来かも知れない大雪であったのである。それに正月の天気概況は（十二月二十九日、毎日）では、三十日から元日は好天気、二日から下り坂と大きく出ている。

遭難者達はその概況で三十一日に山麓宿泊、元日のご来光を久住山頂で迎えようという計画で入山していると思う。それが三十一日の夜から崩れてきた。暴風雨警報も出たという。しかしそれが徹底したか、させたか。

それで中止すれば問題はなかったが、彼等は一日朝から大船山に登って、その足で久住を目指した。「それが甘かった」とそれにも批判を加えているが、その「甘さ」は遭難者だけであつたらうか。結果論はいずれも辛い、その辛さがそれ以前にどれだけ言葉のうへー警戒対策、施設にあつたらうか。勝者絶対の感を私はそれ等の批判者から受けたのである。

遭難者達が登山の訓練を受けている人達なら、それらの批判もうなづけるが、彼等は半観光登山者と言っている、冬山には幼稚園級であつた。そして九重登山者の大半はその級の人達であり、山そのものもその級である。それなら当然施設の面にもそこに重点を置くべきで、登山口には目に余るような標塔が建っている、登山路には一本も完全な指導標もなく、（遭難現場附近には一本の指導標もない）山小屋は冬は冷蔵庫に等しい現状ではないか。

「こんな遭難があつては、九重

山は怖がられて観光者が減りはしないかと心配だ、——観光協会の記事に、これが本音かと私は唖然とした。

二、三日して私はまた山に帰るとすぐNHK大分に招かれ、K氏を加えた九重の冬山についての座談に駆けつけたが、そこでも施設の点を強調したものの、却って観光関係者には反感を買ったのではないかと推察した。一面からは山の施設は自然を傷つけますが、それは山による。九重は観光地として県内でも認めていて、四一年度の国体登山に今から反対論さえ出ているくらいである。

この遭難について、最近地元の人達の間で施設実現に尽力をされていることは、遭難者に対してのごうごうたる批判に「そうまで非道く言わなくとも」という同情心が大きな動機と聞くが、私も世の批判者よ、現地の状況も一応知って批判なり教訓を披歴して貰いたいと思う。九重には気象観測所の一つもないことを知る人は少ない。

以上のことは私の過剰な見方かも知れないが、今回の百年来の悪天候に、気象通報の不徹底、施設の不備の点など世の山のベテラン、識者には登山地の施設の充実の急務であることを認識されて、ご尽力を願いたい。

第二一七回小集

◇日時 37年1月20日（火）6時
◇会場 体協会議室
◇演題 ベル・アンデスの山々
◇講師 吉沢一郎氏

×
ワスカラン北峯の初登をはじめ、ブカヒルカ、アポロパンバ、コルデイエラ・ブランカの諸山群の十数峯に足跡を印した体験記をスライドによって深く印象に刻みながら鑑賞した。五千米の氷河上におけるゴルフの高度記録の挿話もあり、映画の完成が期待される。

またご出席の深田久弥氏から若い会員のために吉沢氏の永い登山歴の紹介や、藤島敏男氏の昔の小集会の思い出や、小集会の運営についてのご意見をいただいた。

出席者氏名

渡辺武郎、吉田薫、広谷精啓、長谷川捷一、倉知敬、岸田光裕、水田健之輔、佐藤隆太郎、氏家陸男、近藤信行、池田光二、大森弘一郎、高木菊三郎、遠藤隆三、鈴木郭之、坂倉登喜子、野口末延、山崎智弘、折井健一、中島伊平、山下一夫、宮下富蔵、藤島敏男、深田久弥、村尾金二、吉田榮孝、片淵正己、金坂一郎、村井葵、岩佐吉雄、鏡木昇、奥川雪江、荒木正弘、山口節子、石原憲治、北原春子、以上三十六名

そしてこれは一九重山だけの問題ではないと思う。今回の遭難現地に一本の完全な指導標があったなら、七人もの人命は失わずに済んだであろうからである。

それと共に世の観光登山者よ、夏山では空缶、弁当ガラなどを浴せて、山を遭難させていることが、いつかは山の逆鱗に触れて、その制裁の及ぶことも記憶して貰いたいと思う。

(三七、三、七)

(八幡製鉄九重山荘・福岡支部)

三・月・の 石・鎚・山

松長晴利

昨年末から年始への降雪は石鎚山系でも稀有な大雪であって、正月休みを石鎚山に来た人達には大変なアルバイトであった。

十二月三十日に瓶ヶ森で一名、一月二日に石鎚山で一名凍死者を出して騒いでいる時、愛媛山の会員が一名、三十一日朝松山発午後一時頃、面河亀ヶ腹を通り、その夜はビバークして翌一月一日、丸瀧山の小屋へ午後三時頃到着して泊り、二日朝八時、吹雪の中を出発して土小屋へ向ったが単

独行であったので、積雪のため約二キロ許り行った所でツェルトの中に寝て、三日出発したまま行方不明である。

捜索隊(岳連会員)は四日から行動して八日に至り足どりをつかみ、翌九日から自衛隊の応援を得て捜索の主力を面河本流及び金山谷から石鎚、土小屋、筒上山の線に上げた。

十日、雪の斜面から僅かに黄色いツェルトの一端が出ているのを発見したが、積雪は一米以上あって樹木の下は熊笹に覆われた山で、吹雪と新雪のため遂に発見出来ず、十二日捜索隊は一応撤収した。

例年なれば一月の中旬までは、時に地肌を見せることさえあるが、今年はその後も降り積っているので五月上旬でも相当の残雪があるものと思う。

以上で今年の石鎚の積雪状態を幾らか想像して頂くことが出来ると思うが、三月末にも県外から多くの登山者があり、また近年、関東地方の大学の入達の来山する者、或は照会が可成り多く、中には冬山の経験の無い人の照会も相当あって、暖かい四国の山だからと考えている人が多い。

三月下旬、愛媛岳連では石鎚山北面で恒例の春山鍊成会を行うが、そのころの北面は積雪に覆われて、霧氷を見、降雪を見る。昨

年は三月二十日から三日間、四国岳連大会を併せ挙行したが、ベイスにした二の鎖下小屋の上の鳥居が一二〇センチ位雪の上に出ていたのがその後二十四、五日頃降って鳥居に腰が掛けられるような状態であったそうである。

山小屋は石鎚山、瓶ヶ森何れも利用は出来るが番人は不在の時もある。従って寝具、食糧、燃料等一切持って行く必要がある。ピッケル、アイゼンも石鎚北面では要る。

正月の石鎚登山者は何れも重装備で来ておられたようであるが、三月末から四月初めに軽装で登山する者がよくあり、暖かい陽の当る面河側から登って、乗越から北面に顔を出して一変した冬山に驚いて引返す人もあるが、三の鎖下まで八〇米ばかりのトラバースする所では最も注意を要する。

三月下旬から四月上旬に石鎚を訪れる人は、氷点下積雪登山の装備で来て頂きたい。従って天候に恵まれれば氷雪の良さを充分味わうことが出来るし、石鎚山北面で最も遅くまで残雪のある雪瀑谷の雪深登攀は石鎚小屋、或は中腹成就小屋をベースに快適なトレニングの場でもある。

〈あとがき〉

今冬の遭難は本州から石鎚山へ飛火して、暮から正月にかけて三人もやられました。五月の連休が思いやられますので書いてみました。

近年の石鎚は、正月は三ヶ日に毎日二百三十人が大阪、京都、兵庫、岡山、山口、大分、宮崎、佐賀。最も多いのは福岡から訪れています。毎年私はパトロールに登っており、今年正月二日に敗退しました。

(三七・一・三〇)

(愛媛県山岳連)

ヒマラヤ登山学院々長の交代

ゲーリソンのヒマラヤン・マウンテン・アライニング・インスチチュートの院長キャン・シン準将は今度軍隊に復帰して砲兵旅団長に転出する旨、三月二日付同準将から日高会長あて通知越すとともに、従来日本山岳会の協力と助言を感謝し、後任のB. S. Jaiswal 中佐にも同様の支持を与えてほしいと丁寧な挨拶状がとどいた。

日高会長からは三月二十六日付で、会員と共に、同準将の業績をたたえ、従来の厚誼を謝し、新任の成功を祈る旨の返書を送った。(S・H)

(司会・中島伊平)

帰国にあいさつ

拝啓 厳寒の候愈々御隆昌のことと御慶び申し上げます

陳者昨春皆様の御理解ある御支援の下に一橋大学創立八十五周年記念に併せて一橋山岳部創立四十年記念事業として、南米アンデスに遠征隊を派遣いたしました。既に朝日新聞、如水会報その他で御承知の通り、初の海外遠征としては、所期以上の成果を収め、正副隊長は十月、隊員五名は十一月三十日、何れも出発時にまさる元気で帰国いたしました。

これは偏に、皆様の温かい御支援の賜と心から感謝に堪えない次第でございます。

遠征隊は、皆様の御期待に背かず、第一目標のプカヒルカ北峰の初登頂をとげた上、アポロパンバ山群の十指に余る初登頂をも記録し、この間、全隊員に何等の事故もなく、下山後はベル1及びボリビアの経済調査に従事し、且つ若干の資料を携えて参りました。何れ全般的記録、写真、資料を整備の上、報告会、展示会、出版その他を通じ、皆様の御厚意に応えたいと存じ、目下諸般の準備をすすめております。

遠征隊の帰国に際し、拝眉の上御礼申し上げるところでございますが、略儀ながら、紙上を通じて遠征隊の成功を御報告し、併せて今後の御指導をお願い申し上げます。敬具

昭和三十三年二月

一橋大学アンデス遠征委員会

委員長 中川 孫一

委員長 関 恒義

委員長 山田 恒義

委員長 吉沢 仁一

委員長 利村 滋則

委員長 中丸 則一

委員長 中丸 則一

委員長 中丸 則一

委員長 中丸 則一

委員長 中丸 則一

山崎春雄氏

藤島敏男

ながい病臥のすえ、昨年（一九六一年）十月、山崎さんの逝かれたことは、北大の山仲間にとって慈父を失ったような大きな悲しみであったに違いない。東京の知友たちにも大きなショックであったし、会としては在籍三十年のふるい先輩会員を失った損失は取返しがつかない。

山崎さんの入会は昭和六年二月

紹介者は伊藤秀五郎、横有恒、松方三郎の三名、四十五才のときである。これはその三月欧米出張に出かけるに当って、JACのメンバーシップをもっていた方が、都合よいと考へられたようにも推察される。渡欧後は、はたして「一寸シベリア旅行の疲れを休めるとの口実でグリーンデルワルトにやって来たのですが、すっかり根が生えて一ヶ月以上も暮してしまいました」ということになり、横さん以来のガイド、サミュエル・ブラヴァンドと、アルプスの峰々を、貪欲なほど登られたのだ。会報第十号の「瑞西だより」は、横氏宛の通信から私が書抜いたものだが、山崎さんの張りきり方が、よ

く出ている。帰国歓迎の席で「老いらく（山窓い）」と言われて、御本人は嬉しさうだったのを思出す。

たしかに山崎さんの山は、老いらくと言わないまでも、中年からの山であった。学生時代から若い頃は文学芸術を愛する青年であったことは、木下李太郎、児島喜久雄の両氏が終生の心友であったのからも窺われる。

「木下李太郎（太田正雄）」とは中学、一高、東大を通じての同窓であり、親友であった。山崎は中学以来造形芸術を理解する点では太田正雄の尊敬する友であり、彩管に於ては彼をぬきこんでるものがあった。太田正雄が画家になることを断念するに至った理由には、山崎が彼よりも画が上手であったにもかかわらず画家にもならずに医学を志した事がふくまれていた程である。山崎は又、北原白秋や吉井勇や長田秀雄等にとっても画才の所有者として多くの影響を与えたようである。山崎春雄は彼等詩人のよりよき理解者ではあったが、文学の同志ではなかった。――

本太郎白秋秀雄によるパンの会詩人の都会趣味的機関誌ともいへき「屋上庭園」二号に山崎春雄が、美術に対するすぐれた批評眼を示した「形式の芸術批評に就て論ぜる書」という通信風の美術論の筆をとっている。

これは「日本耽美派の誕生・野田宇太郎著・昭和二十六年一月・河出書房刊」からの引用であるが若い頃の山崎さんを想見させるものである。その山崎さんがスキーや山登りに熱を上げるようになったのは、大正十年（三十五才）熊本から札幌へ転じたのが動機で、北大文芸会スキー部の山班の人々（松川五郎、植田守、井田清、伊藤秀五郎等）からスキーを吹込まれ、札幌附近、中央高地、日高の山などを、主として積雪期に、頼もしい、よい若者達と大いに歩かれた。俗化しない自然の姿をまだ多分に保っていた北海道の山が、ホームグラウンドにあったからであろう、本土の山へはあまり足が向かなかつたらしく、槍穂高縦走、スキーでの白馬岳といったところにとどまったようである。私は昭和九年一月十勝吹上温泉から上ホロカメトック、フラノ、十勝の三山、十年一月ヘルヴェチア・ヒュッテの生活を、山崎さん



石井鶴三

会員通信

会津駒ヶ岳

吉田竹志

七月二十八日朝、川治からバスで会津田島へ向った。二軒位にして五十里湖へ来た。ダム竣功後三年だが天然湖のようであり、北ア山麓の木崎湖を想わせる。

羽塩へ下車してバスを乗りつぎ、六軒位して道は中山峠への上りになり、七つ岳が見えて来た。峠の下りは一時間位で山口に着いた。一時間待って檜枝岐へ向った。丸屋前に車が停ったのは午後六時半だった。

翌朝は七時に発って滝の沢橋を渡り、沢の右岸の瀾葉林の急坂を上った。

針葉林になって樹の間から駒の全容が見えてきたので心は躍ったが足は不躍（おどらず）だ。

坂は少し緩くなったが、七十六才の老人には苦手だった。池の平に出たがまだまだ頂上は遙かに高いが永年の待望の山だから、苦しい努力をつづけて、六時間半にして漸くに駒ヶ岳の一等点に立ったのが午後一時半だった。

眺望は最上で南方は日光白根、男体、女峰、近くは帝釈、田代、那須の山々。西方近く燧、景鶴、至仏、その他奥利根越後の山々。

帰路は池の平大池より富士見林道から大津岐峠へ向ったが、田代や小池がところどころにあり、変化はあるが上下が激しいので苦しい道だった。峠から大津岐林道では大倒木が数ヶ所で悩まされ、キリン手に出て足がダメになって困っていると同方にライトが光ったと思うと私の前に止った。

これは宿の丸屋が心配して見に来てくれたので、これは有難いとモーターサイクルの後へ乗せてもらって帰った。実に感謝の至りである。

檜枝岐からの帰りは駒止峠経由のバスだったが、往路の中山峠より山が低いので見劣りするが、深みのあるのが印象的であった。

× × ×
× × ×
× × ×

（三六、七）

と共にした。芯からの山好きだっただけでなく、広い深い教養の持主だった山崎さんの、含蓄のある話の数々は、いま思出してもたのしいものがあつた。戦後、学会（また楽会に通ずと、よく私はいったものだ）に上京の山崎さんを、JACのルームに迎えて、談笑の数刻を過ごした楽しい想出をもつのは、私のほかにも会員の中にすくなくないであろう。

本会々報「山岳」への寄稿は昭和六年十一月会報第十号「瑞西だより」と昭和二十七年一月、会報第一五九号に「ヘルヴェチア・ヒュッテの二十五周年祭」、「山岳」第四十八年に「ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下」の三稿がある。「瑞西だより」は断片的ながらアルプスの風物がイキキと描かれており、「廿五年祭」は、あの粗朴な可愛らしさをもつヒュッテのことがよく描かれ、「山岳」の稿は極めて謹厳な文章でありながら、痛烈な皮肉や諷刺がタツプリと織込まれ、汲めどもつきない滋味あふれる一文である。

一九五七年四月スイスからブラヴァンド来朝、ともにアルプスを歩いた面々が喜んだのはいうまでもないが、二十六年ぶりの再会に

山崎さんの嬉しそうだったことは傍にいた私まで眼がしらがあつくなるほどだった。そのあと軽しい発作を起こされ、東京で休養後帰札されたとき、山崎さんは東京でわれわれの仲間に加わる機会なくして逝かれた。いつも遠くに離れていたせいであろうか、私には山崎さんがまた学会——楽会にいつか上京して来られるような気がしてならない。

・略 年 譜・

明治十九年二月四日 前橋に生る
独逸協会中学・一高・東大を通じ
木下李太郎と親交を結ぶ。三宅克己画塾にて児島喜久雄と知る。

明治四十三年十二月東大卒
大正二年一月熊本医専教授、狩猟を始む。八年三月——十年六月欧州留学、独逸へ入国出来ず、瑞西ベルンに滞在したるも、アルプスに登山を試みず。

十年五月北大医学部教授、この冬よりスキーを始む。

昭和六年三月欧米出張、アルプスにて大いに登る。十二月帰朝（四十五才）廿三年北大退職。廿五年札幌医大教授。卅三年退職。卅六年十月廿一日病没（七十五才）。

（一九六二年三月記）

（編者あとき）

山崎春雄氏の文芸関係について
右について詩人野田宇太郎氏よりつぎの通りのご教示をいただいた。

「わたくしは一度はお目にかかり度いと思ひながらついに拝眉を得ず後悔してゐる一人です。山崎氏は少年の頃から美術的素質にもめづられた方らしく、その中学時代などは独逸に記録があると思ひます。太田正雄（木下李太郎）とは交遊、ことに文芸的な交遊は大学をはなれたまでずっとつづいたやうです。わたくしは木下李太郎の伝記をしらるるために山崎氏に紙上めぐりあつた者にすぎませんが、山崎氏は明治四十年の「明星」にもすでに絵を（九州の旅のスケッチ）寄せてゐます。その頃はまた石井柏亭なども親交があつたやうです。

「屋上庭園」二号（二号は発禁で終る）は明治四十三年二月のもの、一昨年（三四、六、二五）冬至書房から一号と共に復刻本を刊行したわたくしの書いた解説もそれにはいつてゐます。

明治四十二年三月号の「昂」（スバル）にも李太郎の文に山崎氏が挿画した「旅行記念」があります。大休山崎氏はいろいろな雑誌にはあまり書かれず、ただ李太郎との交りの範囲ですめられるまゝに書かれたものが大部分のやうです。木下李太郎全集（岩波）の書簡にも少しあります。たゞ山崎氏が保存された李太郎のもので、山崎氏自身のものでありません。山崎氏の文芸的一面については今のところ李太郎の書いたものがほとんどすべてのやうです。あとは明星やスバルなど又屋上庭園などによつて、若き日の山崎氏の動向を知るより他はありません。野田宇太郎」以上



道志川・雁腹・神流川

川 崎 精 雄

スキーブームへの反発を感じて、今年の一月は雪と藪の交錯した山ばかり歩きました。

先ず暮から正月にかけては、長女を連れて秋山川と道志川の谷へ行きました。

元日の昼頃、巖道峠から赤鞍尾根の藪こぎをやっていると、急に

はげしく雪が降り出し（後立山方面で天候急変による遭難のあつた時刻）たので、がさがさと道志の谷へ下りました。真白になった元

日の山村は静かで、スキー行と異つた情趣がありました。道志川温泉には十二月中旬に行つたばかり

で、その時は三十二年ぶりの加入道登山をやりましたが、正月に来

れば沢蟹ととぶろくを御馳走して呉れる約束だったのです。バスが

不通となり、三日に中型トラックを出して貰いました。

中旬にはやはり長女と岳友二三を連れて、雁が腹摺山へ出かけました。金山鉱泉に泊りましたが、

一年半以上も経て依然未完成の宿は寒くて堪らず、一晚中ふるえたりボヤいたりでした。

吹切尾根を辿るつもりでした

が、積雪が深くてキャラバン靴の者は凍傷を起しそうなので、谷間の炭焼小屋へ逃げこみました。奈良子川沿いの道がひろがり、昔の高い断崖の上を辿る栈道がなくなりました。

下旬に三日間、下仁田から忘れられたような八倉峠を越えて神流川の谷口に入り、叶山、二子山へ登りました。これは単独行で、終始登山者に遇いませんでした。

八倉峠は雪もかなり深く、峠に立つて北をふり返ると上越北信一帯を雪雲が蔽い、南を見ると雪の鎧をきた両神山の威圧的な姿をはじめ、秩父奥の山々が黒く且白くありました。叶山も二子山も谷間は雪が多く、思わぬラッセルをやら

されました。叶山の日溜りでは悠々と遊ぶ雉子に見惚れ、二子山の雪を着けた岩場では折柄の突風に飛ばされそうでした。

志賀坂峠はドライブウェイが走り、昔日の俤はありません。河原沢の古い宿森本旅館に泊りましたが、風呂を沸して呉れず一日中冷えた身には落胆しました。三十何

年前にこの宿に泊って、冬の尾内沢から両神山へ登られた神谷恭さんのお元気を、あらためて思い浮べた次第です。

（三七・一）



図書紹介

石井 鶴三 画

本の手帖

山の本特集号

「本の手帖」二・三月合併号が山の本の特集号を出した。主な内容は、アルプスの本(松方三郎)・ヒマラヤの本(田辺主計)・ネパール側からのエヴェレスト(島田巽)・百年前のヒマラヤの本(深田久弥)・山の詩と山の詩人(尾崎喜八)・山の画文集(串田孫一)・山と本の回顧(冠松次郎)・日本アルプスと秩父巡礼(田部重治)・山岳写真集(船越好文)・雑誌山岳のこと(小林義正)・学校山岳部の部報(山崎安治)・美しくも悲しい本(安川成雄)となかなかおもしろい顔ぶれがならんでいる。執筆者はそれぞれうんちくをかたむけているが、なんとしても限られた紙面なのでいずれもつつこみ不足の感じである。執筆者の数を減らしても、もう少し内容に深みをあたえたらと惜しめる。

小生がここにあえて本書をとりあげたのは、別の意味があるからである。安川氏は美しくも悲しい本」という中で、小生が慶大の部報「登高行」十一年を手に入れ鬼の首でもとったように喜こんだと書かれているが、これはあわてものの安川氏の思いがいで、小生が手に入れて喜こんだというのは「登高行」十一年ではない。

小生が手に入れたのは、「登高会々報」の七号である。「登高会々報」というのは慶大山岳部の先輩団の会を出しているもので、戦後も数冊出されているそうだが、とくに昭和十六年五月の発行になる七号は本文一八四ページ(ドウ・ソースユール研究)という大冊である。この号には「登高行」十一年について、一般に未発表である大島亮吉氏の書簡やまた小生が学生時代から「登高行」を通じてひそかに尊敬していた故小森宮章正氏のくわしい略歴、書簡、追憶記のせられており、「山岳」には谷口さんが書いていっている。戦争中の出版で非売品であるだけに一般にはそうゆきわたっていない種類のものではあろう。それで三田さんも珍らしそうに手にされたといいわけである。

「登高行」十一号を入手したことで、それほど小生が喜こんだと思

われてはなんなので、とくにこのことをつけ加えここに訂正させていただくことにしたのも、この小さな雑誌の執筆者がいずれも本会々員だからである。(山崎安治) (昭和三十七年三月一日、昭森社発行、定価一五〇円)

The Mountain World

1960/61

Swiss Foundation for Alpine Research

一九五八年にこのシリーズの五冊目 1958/59 が発行されたが、その直後の八月十七日にエディターであったオートマー・グルトナー氏が急逝されたため、一時このシリーズも打ちきりになるのではなにかという説も聞かれたが、この度三年振りに新しいエディター、ミューラー(Hans Richard Muller)マルセル・クルツ(Marcel Kutz)両氏により、このシリーズの六冊目が刊行されたことは喜ぶに堪えない。カバーのデザインが変った他は前巻と全く同一の装釘で、相変らず写真の印刷は素晴らしい、内容も一段と充実している。

内容は一九五八年から六〇年夏にかけてのアルプス地域以外での重要な登山記録と極地の遠征記事でみだされておき、この中には八

千米を超える二つの巨峰、ヒドン・ピークとダウラギリの初登頂記録が含まれている。ミューラー氏の巻頭言をみると「八千米を超える巨峰十四座の中、これで十三座が登られた。残りの一つゴサインタンは残念なラネパールの国境線を越えたチベット領にあって登ることはできない。しかし六、七千米の未登峰ならば数多くのこされて

いる。これらはこれから十年間の遠征のために広い舞台を提供することになる。低い八千米峰と高い七千米峰との間にどれだけ差があるだろうか。」いゝかえてみれば八千米峰初登頂の第一期ヒマラヤ黄金時代であった十年は終ろうとしているが、これからは愈々第二期の黄金時代に入るといふような意味のことをかいているが、まことに同感である。この他に同氏は「ダウラギリ隊が採用した飛行機の利用も新しい登山技術の一つとして近い将来益々きかに用いられることであろう。一方アンデスに於ても、高峰の初登頂時代は終りに近づいている。しかし初登頂という記録的なことはなれてみれば、まだまだいく

らでも、登る価値のある山は残っている。一九五九年のスイス山岳会のアンデス遠征隊の記録は、そこにまだまだ未発見の地域があ

り、征服さるべき重要な山が沢山あることを想い起こさせる」という二つの興味ある示唆に富んだ文を綴っている。

本書の中でヒマラヤ関係の記事は、ラカボシ(パティ)、ハラモシ(F・マンドル)、ヒドン・ピーク(R・スイフト)、ガッシャーブルムIV峰(F・マライニ)、一九五九年のバツラ・ムスタグ(J・エドワーズ)一九五九年のドイッ・カラコラム隊(H・シュナイダー)一九五九年オーストリ隊によるダウラギリ(F・モラベック)、一九六〇年スイス隊によるダウラギリ初登頂(M・アイゼリン)、トリヴオール(W・ノイス)と九つの記録が収載されている。

他に登山記録としてはソ連領ピーク・ポヴィエダ(W・キーツエル)、アフリカのルヴェンゾリ(D・ライスト)、一九五九年のスイスのアンデス遠征(R・シャツ)、国際地球観測年の南極(H・ホインクス)、英国隊の南極横断(G・ロウ)カナダ領バツフィンランドの北極の山(F・シユヴァルツェンヴァッハ)が収録されている。

この他の記事としてはアーノルド・ランによるウインスロープ・ヤング伝、マッキンリー隊でな

じみの深いB・ウォッシュバーンによる空中写真撮影の記事とマッキンリーの地図の説明、ウィス・デュナンによるイエティは二足獣か四足獣か?という興味ある記事がみられる。毎号写真の素晴らしきことでは定評のある本シリーズであるが、今回のものも印象に残るものが多い。別刷附録のマッキンリーの地図も素晴らしい、この方面の技術が非常にすぐれていることを実証している。今後この方面への登山者にとって種々と役にたつことが多いと思われる。

しかしながら我々にとってまことに残念に思われるのは、こうした書物に邦人の海外遠征の記録が掲載されていないことである。当然のべきチゴリザ、ヒマルチュエリの初登頂記録がみられないのは、何としても寂しい。こうした記録はつとめて投稿すべきではないだろうか。本シリーズの次号に収められることを希望してやまない。

尚今後は出版社の好意に応じて二年毎に一冊の割で刊行されるとのことであるので楽しみである。本文二六二頁、写真五十八葉、地図十一葉、別冊附録として五万分の一マツキンリー地図一枚。定価二五五。

(松田雄一)

牧 之

―百二十年記念出版―
塩沢町・鈴木牧之顕彰会

山の本の中へ入れて見ても、すこしもおかしくはなく、むしろこゝろした類のものもつと生れてほしいという本が必ずある。そのくらいであるから、ある人はそんな本を山の本のひとつとしてとり入れていくかもしれない。そんな本の中にわが国の地誌ものの書だけで云っても、「利根川図志」、「甲斐国志」、「武蔵風土記稿」、「北越雪譜」などあげればいくらかもあるが、ここではその中の「北越雪譜」の著者についてのことをだけを取りあげて見たいのである。

この雪譜の著者が鈴木牧之という越後(新潟県)の塩沢の豪家の主人であることは、この書が戦前から岩波文庫に出された為、その解説によって、あまねく知られているであろう。この牧之がなくなつて昭和三十六年で百二十年になるというので、翁の徳をたたえ、一般の人士により正しく彼の生涯を伝えるため顕彰会により、その事業の一つとして「牧之」という単行本が発行されたのである。

一人の伝記であると言ってしまうえばそれまでであるが、一読して感ぜしめられたことは、牧之はこの「雪譜」を出すために一生の半ばをさげているということである。あわせて、今もそうであろうが特殊ものの出版のいかに困難であったかと言ふことも、うかがい知られることなのである。

牧之が雪の多い郷里のことを江戸の市民などに伝えたいと、その雪国特有の風俗習慣、あるいは奇跡珍談をとり入れた書への企画は三十才ごろのことである。著作に経験のない彼は、まづ当代一流の山東京伝(当時この人だけがやつと文筆一本で自活できるぐらいであった)に草稿を送った。すると京伝は「北越雪譜と致し、絵入読み本五冊として、雪の故事古歌などを加へ出版いたさむ(文政十二年、書簡)とあり、それには版元は見積の百兩をくれという。京伝著、牧之校之の条件でもこの種の内容では版元がこんな類の本はうれるということに自信がもてないのである。

そこで、こんどは京伝の門弟、滝沢馬琴に依頼するのであるが、ていよくことわられるのである。この後、大坂の岡田玉山(著作家)にも依頼したが本人に死亡されてしまった。この頃に彼は苗場山に登山をしているのである。(文化八年、一八一)これより再び馬

琴と出版交渉がなるやに思えたが止み、こんどは京伝の弟京山にうつるのである。かくて雪譜の市の中に売り出されたのは天保八年(一八三七)の晩秋であった。初篇上巻には天保六年の序あり、下巻には天保七年発行のことが記されているが、彼は天保十三年七十三才で他界するのであるが、その五年の念願がかなつて北越雪譜は世におくり出されたのである。

こんな雪譜にまつわる事などこの伝記にはもたれている。わたしたち登山者には一番心ひかれることがらである。この他、著作、関係文献、家系、年譜とあつて、鈴木牧之のもつとも正しい貴重な資料である。(小野 幸)

昭和三十六年五月発行、二〇〇頁
箱入、新潟県塩沢町公民館、鈴木
牧之顕彰会発行、非売品。

1 フランス山岳会報 (La montagne) 1933
2 1937 (日高会長寄贈) 上記寄贈の会

1922~1937の欠本	1932年	1933年	1934年	1936年	1937年
1922年 No.154	166	244	245	247	251
1923	190	247	251	253	255
1926	197	251	253	255	284
1927	199	253	255	284	
"	200	255	284		
"	201	284			
"	202				
"	203				
1929	7				
1930	12				

(注) 1937年はNo.285及びNo.287以外は欠本

36年度第9回図書委員会

一月二十五日・ルーム

- ・出席者 深田、小林、徳久、加藤、大橋
- ・議事と報告

①来年度の事業について
従来の整理、保存、紹介に購入を加え、その他資料蒐集(戦後海外遠征の写真、スライド等)、洋書文献目録発行、日本山岳会人物評(J.A.C-REGISTER)の編集等を行なう。

②来年度の図書予算について
要求総額25万円、内訳、図書購入10万、整本2万5千、レジスタ1編集4万、集会1万2千、雑費2万3千、他に会費洋書文献目録印刷費4万を出してもらう。

③レジスター編集方針
第一期として、千番位までをやる。A項目V氏名、生没年月日、履歴、山歴、入会年月日、山岳会での役職、著書、山岳、会報に発表の論文、山岳会の集会等での講演以上について記録を集める。責任者に徳久氏があたることになった。

36年度第10回図書委員会

二月二十二日・ルーム

- ・出席者 深田、徳久、加藤
- ・議事と報告
- ・航空写真購入について
- ・タイプ購入について

既存のタイプを修理して使用する
③昭和36年度の図書委員会報告と新年度計画について



佐藤久一朗

会務報告

二月理事・評議員会

一日・ルーム

▽日高会長、理事渡辺、浜野、折井、太田、川上、木下、村木、徳久、田村、古沢、中島、監事野口評議員小原、深田、青木、牧野(静岡支部長)、岩佐(東京支部)▽議事と報告

①新年度役員推薦について

(折井)

・日高会長が健康上の理由で辞任を希望されるに伴い、後任会長、副会長、その他についても新しい構想をたてたいので、適任者の推薦を願いたい。三月役員会までには総会への推薦者を決定したい。

②新年度予算編成について

(太田)

・各係責任者は新年度の予算案を至急提出していただきたい。

③ルーム・山荘募金の応募状況

(太田)

・一月三十日現在まで一、三八

三、五〇〇円、約四百口である。各支部の分は現在未着につき予想がつかない。

④海外登山の外貨割当について

(村木)

・標記については北大は三十六年度分の中から種目振替で割当を貰える見通しがついた。京大、早大は三十七年度分の体協割当を以てする。日大は一般外貨を割当てられた。

⑤第二一八回現地小集會について

(中島)

・本会報第14頁「報告」参照
・静岡支部の現況(牧野支部長)
・一月二十五日支部集會をもち、楽しいひとときをすごした。今後月一回、第二土曜日に定例の集會をもつことにした。現在支部所属会員数三十六名。

⑦第三次登山技術指導者講習会

(川上)

キスト作成について
・今回で一応講習会が終了となるので今までの反省と検討の上、テキストを作成したのでご批判を頂きたい。なお部数を多く印刷したので各支部でご入用の節は遠慮なく日本山岳登山技術委員会に申し込んでいただきたい。

⑧山形支部主催による冬山登山学校講師派遣について

(折井)

・山形支部からの要望もあり、川上理事におねがいする。

・期日 二月十五日・十八日

・場所 蔵王山

⑨文部省主催の遭難対策協議会

(浜野)

・文部省はじめ農林、気象、電々公社、群馬県、長野県、警察署等各方面の参加者があつたようだが、なにか文部省と岳連側代表者のPRのためのPRの感あり賛同いたしかねる点があつた。

⑩六二年版山日記批評会(渡辺)

・日時 二月二十日午後六時

・場所 本会ルーム

・来年度山日記をより良いものにするため会員の多数ご出席をお願いしたい。

(1)「山岳」の総索引について

(古沢)

・故沼井鉄太郎氏の労作になる本会「山岳」の初号以降の総索引は原稿のまま本会ルームに存置されているが、会に刊行の計画はないのか、会としては至急担当責任者を決め、年次計画にのせ、予算措置を講じて可及的速やかに刊行をはかるべきであると思われるが如何。

△本件は議事録に記載が洩れたため編者に於て追録をした△

三月・役員総会

八日・ルーム

▽日高会長、松方副会長、理事渡辺、浜野、折井、太田、山崎、川



第二一八回現地小集會報告

標記集會は三月三日・四日の両日、宮城県表蔵王樹氷地帯を中心に行われました。東北地方で開催致すのは山形、福島に次いで三回目ですが、各地より会員多数の御参加をいただき地元関係者並に当宮城支部と致しまして感激いたしました。

御参加の皆様は主として東京支部の方々が多く、越後支部、秋田支部会員併せて県外四十名、また本集會を一層意義づけたものとして中華民国台湾山岳協会所属の台北市登山会訪日団周廷旺君の御参加でありました。地元会員関係者は三十二名で迎え、蔵王一の山荘を誇る「かもしか温泉・白雲山荘」もこの両日は全国の岳人によっていかにも活気に溢れた豪華なものとなりました。

日高会長が急用のため御参加を得なかったことは残念ではありま

したが、東京より折井、古沢、岩佐、野口、松本の各氏や村井米子氏、それに作家の中河与一氏等の御参加を願うことができ、皆々様の御協力によってなんの事故もなく盛會裡に本集會が終了できましたことは同慶にたえません。

三日夜は六時より山荘ホールで懇親パーティーが開かれ、宮城県知事、白石市長、宮城県岳連会長より歓迎のことば、続いて白石市よりの記念品が全員に贈呈され、会長代理として野口末延氏から御丁寧なる御挨拶をいただいて懇談に入りました。

テーブル上には医務班として仙台市立病院から参加した瀬戸京子さんによる女らしい心づくしの一對のおひなさまと桃の花が飾られて、雪に埋もれた山荘の中は一しおの情緒がかもし出されたものでした。

雪山にひなを祭りて友集う

米子

また芳野超夫会員から南極のペンギン踊りや、地元会員で最年長の平沢先輩から台湾の山々の思い出話などがひろろされたりして、またたく間に三時間余が過ぎ去って、最後に地元会員の蜜声で蔵王の歌、さんさ時雨が紹介されて和気あいあいのうちに終わったのが九

上、村木、金坂、田村、監事野口

松本、評議員成瀬、藤島、神谷、深田、高山（信濃支部長）、牧野（静岡支部長）、辰沼会員

委任出席三田、古沢、木下、徳久望月、交野、藤木。

▽議事と報告

①インド国防省主催「高所医学に関するシンポジウム」出席報告（辰沼）

・場所、ダージリン。期日、一月四日～七日。のんびりとした会合で楽しい雰囲気につつまれていた内容については会報に報告する。

②役員改選について（折井）

・日高会長辞任につき、後任として現副会長松方三郎を推薦。副会長三田幸夫留任、松方副会長の後任に現常務理事渡辺公平を副会長として推薦。東京支部長として石原憲治、新理事として辰沼広吉、皆川完一、竹田吉文を推薦。監事松本熊次郎留任。日高会長は来年度評議員となる。任期一年。

・来年度山岳協会副会長は日高会長にかわって松方新会長が就任する。

③役員会のあり方について（同）

・理事会が単なる事務連絡にのみ終る傾向があるが、会としては山の思想的な方面も掘下げて考える必要があるため、常務理事会、常任委員会などを週一回位開くよう

にしていたきたい。

・支部長会を年三、四回は開いて各支部相互と本部との連絡を十分とるようにしてほしい。

④通常会員総会について（折井）

・期日、四月二十一日

・場所、体協会議室

・十二時三十分より東京支部総会二時より会員総会開会。

⑤会費値上げについて（太田）

・地方支部 一、二〇〇円

（支部費は支部の実情によって各支部で決定する）

・東京支部 一、六〇〇円

（支部費として一〇〇円が含まれている）

・入会金は三〇〇〇円。終身会員費については一〇万円、二〇年以上の在籍会員は五万円。

⑥ルーム、山荘募金について（太田）

・口数二八八人、一、七五五、五〇〇円

各評議員には重ねて募金方を願っている。

⑦「山岳」広告について

・広告代一七八、〇〇〇円集る。これを以て打ち切り、今月末発行予定。

⑧韓国山岳会について（折井）

あった。

⑨海外遠征費について（日高）

・日大、北大はすでに学術調査割当の外貨を獲得したので、体協割当の外貨は京大、早大に割当てられることになり、現在話し合いならびに増額について申請中。

⑩第三次登山技術指導者講習会について（川上）

・期日、三月十八日～二十四日。

・場所、西穂高岳

・今回は暖かい地方から受講生が集まるので、歩くことを中心とした基礎的なものを徹底してやりたい。

・今年度をもって本講習会は終了するので、四月初旬、参加全講師に集まっていたら反省会を開きたい。

以上

・図書委員会・

・36年度は、現有図書の整理を目標とし、本会独自の分類により整理を行い、目録の作成を目的としたが、ほぼ所期の目的を達した。

・来る37年度に於ては、さらに整理保管の完備と閲覧態勢の整備とともに、外国図書を購入し、特殊資料として、戦後の海外遠征の記録、写真、報告を収集すること、及びJ・A・C・レジスターを作るべく準備をしたい。

・なお国内資料・図書についてはできるだけ寄贈依頼により充実をはかりたい。

（担当徳久）

時でした。

翌四日は前日のようにガスと地吹きがひどく一時は山荘ごもりかとも案じられましたが、予定のコースを変更して、賽の河原より風雪の中を国定後見スキー場にルートをとって進みここで二時間余スキーを楽しみました。この間附近にある仙台市役所山岳会所属のこまくさヒュッテで昼食をとり、同山岳部員の奉仕の豚汁、湯茶のおもてなしを受けて休憩の後、午後二時仙南ロッヂに全員下山いたしました。

山小屋のスキージの汁の奢りかな

米子

ただ遠路はるばる御参加いただいた皆様にもことに申訳なく残念でしたことは、悪天候のため雄大な樹水群をお目にかかることの出来なかったこと、諸事万般にわたり至らないことが多く御不便をおかけしたことでした。

また本集会を宮城支部が担当するに当り、宮城県、白石市をはじめ、仙南交通KK、東北大、二高山の会、宮城岳連その他関係各位による物心両面にわたる非常な御理解と御援助をいただきましたことを深謝し報告させていただきます。

（宮城支部・吉野補造記）

▽参加者氏名

（県外）野口末延、折井健一、松本熊次郎、松本宏、岩佐吉雄、加藤元一、関口周也、村井米子、神島保、鈴木英一、生原富平、大原功、朝井一男、池田光二、鶴岡琢也、杉原八百樹、近藤信行、和田有規子、吉田功、萩野公三郎、小野利次、松橋秀次、藤野欣也、佐藤佳年、森敦彦、橋本欣司、芳野超夫、芳野菊子、鈴木郭之、小原晴子、西川可那子、磯崎可代子、加藤ひろ子、高安満、建石八重、島田史朗、陳光漢、古沢肇（以上東京支部、高田俊雄（秋田支部）、五十嵐篤雄（越後支部）、周廷旺（中華民国）。

（県内）須藤県観光課長補佐、北川正次（宮城支部長）、伊達篤郎（宮城県岳連会長、常盤一雄（同副会長）、渡辺徳（かもしか温泉主）、星勝雄、坂本雄吉、平沢亀一郎、吉野禎造、瀬戸輝武、加藤義明、大久保孝、庄子駒男、矢吹雅男、大橋靖子、渡辺昌一郎、渥美亨、鈴木幸雄、渡辺克二（白石市観光課長、大久田和男、斎藤進、藤田博信、千田良三、猪股哲夫、佐々木彦人、斎藤正一、鈴木勝彦、馬淵康平、坂本浩一、佐藤義輝、大泉義信、瀬戸京子。

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×



守門岳から只見川筋へ

日 高 信六郎

—越 後 支 部—
長岡ハイキングクラブ

今秋も越後支部、長岡ハイキング・クラブの諸君に誘われて、神谷さんと二人で出かけ、十一月二日から五日まで会津境の山と谷をまわって、紅葉と山の幸をたのうした。奥津

会長、室賀君はじめ主人役の諸君のほか藤島支部長、伊倉君など、それに途中まで上村、金山両君が加わって、楽しく賑やかであった。長岡で落ち合い、栃尾で電車を下り、植物にくわしく山の開発紹介と自然保護に骨を折っている稲田豊八会員からくわしい説明を聞

きながら、当地特産の見事な錦鯉を見た。刈谷田川に沿って車を走らせる。高名沢で車をすて三十分ばかり歩くと池畔の道院ヒュッテにつく。夜は栃尾山岳会の人たちも加わって話がはずんだ。

翌朝はすこい朝やけが守門連峯の頂を飾った。長尾根をつたい、八海山から中の岳、荒沢岳につづく連嶺を望み、保久礼小屋で一休みし、大岳の頂上で中食を終る頃から霧がまいて雨になった。主峯袴岳からの急な下りは江り勝ちで、歩を阻む沢山の倒木にすがって助かった。ズブぬれになって大原開拓に下りると、五味沢の浅井さんがトラックを持って待っており、夕暗をついて大白川から五味沢に出て同家の厄介になった。藤島、三田両君などこの方面の開拓者らしいの定宿である。夜の膳は岩魚と山菜すくめでありがたかった。翌日も雨が止まず、予定の浅草岳を制覇し、トラックで大白川駅のところから末沢川を遡り、六十里越峠の下から歩るき出した。ふ

り、発電所を見てから上流に向う頃には雲が上って、浅草岳から鬼ヶ面につづく山容が泛び、兩岸は紅葉のまっさかり。大鳥沢の下手大鳥ダム建設地点で湖はおわり、奥只見建設所の小柳会員のお世話でジープを馳せ、奥只見ダムまで川に沿った路を行く、川筋は建設工事に伴う変貌の最中である。ダム直下の地下発電所を見て、夜は石抱の伝之助小屋に泊り、佐藤一家に歓待され、老いて盛んな富永重太郎ちいさんの熊狩り武勇伝を聞いた。

最後の日も雨に明けた。誕生二年目の銀山湖はすっかり満水して虚空蔵岩の絶壁は半ば水没し、浪打みの温泉も買石原の銀山盛な頃の趾も水底にかくれた上をモーターボートで一まわりした。水没した路に代る林道がまだ出来上らず交通は村のモーターボートによる外はない。帰りはトンネルを敬遠して峠路を車で下った。雨がやんで雲が切れはじめた頃、荒沢岳や末丈岳の姿を求めて見かえり乍ら大湯温泉に下りて一休みしたのち小出駅で北と南に袂を分った。上記の諸君のほか、各方面のかがたに大変なお世話になったのは感謝のほかない。

(三六、十一)

長野県山岳協会

所在地 松本市大名町七二番地
発足の年月日 昭和三十六年八月五日

役員名簿(昭和三七、三、一現在)

役 名	氏 名	所 属 団 体
会 長	高山忠四朗	J A C
副 会 長	古原和美	県 岳 連
専務理事	佐藤 貢	信濃山の会
理事	塚本 茂樹	J A C
町田 和信	県 岳 連	
上野 逸勝	信濃山の会	
清水 悟朗	J A C	
石瀬 孝	J A C	
青柳 安照	J A C	
小沢利一郎	県 岳 連	
土肥 逸八	"	
武田 武	"	
小佐波一夫	信濃山の会	
岩崎 明治	"	
長原 和彦	"	
永田 好行	J A C	
村井 栄一	県 岳 連	
板倉 勇	信濃山の会	

長野県山岳協会規約

第一条 名称及組織

本会は長野県山岳協会と称し日本山岳会信濃支部長野県山岳連盟信濃山の会及び県内にある山岳団体で前記三団体に連する組織を有する山岳団体をもって組織する。

第二条(事務所)

本会の事務所を会長の現在地に置く。

第三条(上部団体)

本会は組織団体の統括団体として長野県体育協会に加盟する。

第四条(目的)

本会は県内に於けるアマチュア登山の一切を統括する。

第五条(役員)

本会に次ぎの役員を置く
会長一名 副会長二名 専務理事三名(内一名を会計専務理事とする)
理事九名 監事三名 顧問及び参与若干名

第六条(役員の仕事)

一、会長は本会を代表し会務を総理する。

二、副会長は会長を補佐し会長の事故あるときはその任務を代行す。

三、専務理事は日常の会務を執行し理事はこれを補佐する。

四、監事は本会の業務を監査し理事会に出席して意見を述べることが出来る。

五、顧問及参与は重要な事項の諮問に応ずる。

第七条(役員を選出)

一、会長・副会長は理事会で推挙する
二、専務理事は理事会で互選する。
三、理事は各組織団体から四名宛選出する。

四、監事は理事会で推選し会長が委嘱する。

五、顧問及び参与は理事会の承認を得て会長が委嘱する。

第八条(役員任期)

役員任期は二ケ年とする、但し重任は妨げない。

東京支部会務報告

二月七日(水) 理事会

一、新年度役員選出の件

二、東京支部十五周年記念パーティ会計報告

三、東京支部規定更新の件

四、ルーム移転基金募金中間報告

五、野田理事転勤について、送別会の件

六、第三水行事について

「エクアドルの山のお話」

七、新年度支部予算案作成の件

八、八子ヶ峯スキー講習会のスライド試写

出席者

折井、野田、安彦、坂倉、中、岩佐、芳野、宇田川、加藤、山口、三枝

× ×

三月七日(水) 理事会

一、支部規約改正の件

二、新年度予算の件

三、新年度役員推薦の件

四、三月会員集会の件(三月七日午後六時半、於体協会議室)

一六ミリカラー映画「蔵王の樹水」

宮城支部 伊達篤郎氏

出席者 折井、安彦、中、坂倉、関口、加藤、芳野、岩佐、山口

以上

熊本支部会員総会

さる二月三日、熊本市郊外金峰山の熊本アルコウ会山小屋で開き

来賓とも十九名の出席があった。

三十七年度役員改選のほか、年二回総会を開くことを申し合せて散会した。

次回は五月中旬に阿蘇垂玉温泉で開く。

○

▽三十七年度支部役員

支部長三谷孝一(留任)、委員玉

名金助、首藤宗利、西沢健一(以上留任)

馬場猛(新任)、会計西沢健一(留任)。

▽決定事項

①会費の納入方法

・従来各人が直接納めていたものを、支部でとりまとめ一括納入する。

②本部ルーム並びに上高地山荘建築寄附

・支部で取扱い、支部名で一括して送金する。なお、このほか個人として寄附することはこの限りでない。

▽当日出席者

・奥野、三谷、西沢、菅、荒尾、首藤、猪本、馬場、境、川下、宮崎、山代、以上十二名、来賓二名

会員外五名 計十九名 以上

静岡支部便り

一 二土会の発足

静岡県支部員の連絡と懇親を図ることを目的として、毎月第2土曜日の午後五時半より定期的に、現在東京ルームで行なわれている土曜会の形式で会合を持つことになった。

発会には日高信六郎会長、神谷恭、松本熊次郎の三氏の来静あり

「神谷バー」静岡支店のなごやかな開店祝いであった。

東海道を上下される会員の方々の「2土会」へのご参加をお願いしたい。別に議題があるわけでもなく、集まっているうちに、何らかの方向もついて来ると思われる。

・2土会の会場

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

・静岡市昭和町、竹中工務店四階ルーム。(電②8121)

補充に依り選出された役員は前任者の残任期間とする。

第九條(理事会)

一、理事会は会長が召集してその議長となる。

二、理事会は定員の二分の一以上の出席により成立する。

但し委任状による代理出席を認める

三、理事会は二月・七月に開催する。

第十條(経理)

一、本会の経費は組織団体の分担金補助金寄附金をもってこれにあてる。

二、本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第十一條(加盟及脱退)

本会に加盟又は脱退せんとする場合は理事会の総意を得なければならない。

第十二條(規約の改廃)

この規約を改廃せんとする時は理事会の総意を得なければならない。

附則 1、この規約は昭和三十六年八月五日より施行する。

2、創立当初の役員の任期は昭和三十一年二月に開催される理事会迄とする。

(昭和三六・八・五)

新潟県山岳協会

所在地 新潟県庁国体事務局

時下益々御清祥の程お喜び申し上げます。

新新潟県山岳協会は、この度、新潟県登山協会、新潟県山岳連盟、新潟県山岳部、新潟県高体連登山部との四本建の組織をもって新発足いたしました。

新役員は下記の通り御通知申し上げますが今後とも宜しく御協力をお願いいたします。

記

山岳協会々長				渡辺万寿太郎				新大山部				高田隆平				連部			
役員	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会	山岳協会
副会長	佐久間	平一	七栄	佐藤	五十嵐	田辺	饒村	笠原	笠原	望月	濁川	伊倉	金山	加藤	小泉	藤七	力浩	山崎	荒木
常務理事	佐藤	五十嵐	田辺	饒村	笠原	笠原	望月	濁川	伊倉	金山	加藤	小泉	藤七	力浩	山崎	荒木	山崎	荒木	山崎
理事	佐藤	五十嵐	田辺	饒村	笠原	笠原	望月	濁川	伊倉	金山	加藤	小泉	藤七	力浩	山崎	荒木	山崎	荒木	山崎
監事	佐藤	五十嵐	田辺	饒村	笠原	笠原	望月	濁川	伊倉	金山	加藤	小泉	藤七	力浩	山崎	荒木	山崎	荒木	山崎

(註) 以上により従来御交誼頂きました新潟県山岳協会は、新潟県登山協会と改称して新山岳協会の組織の一団体として境界に寄与致す所存であります。

勿論改称した新潟県登山協会の役員は従前通りであります。従ってJAC越後支部長・新潟県登山協会の技術顧問として藤島玄氏と県連副会長森谷周野氏を登録しております。

昭和三十三年三月 日

新潟県山岳協合理事長 斎藤平七



会員の声

石黒清蔵
(会員番号六一三)

ら乗物で自然の景観に接するは、せぬより良いか知らぬが、体験—それだけの苦勞を身につけるのとは程遠いし、見せかけの登山なら害があつても益にはならぬ。

——と言つて実はこのけじめこそ仲々微妙々々とどれがどうと測定はまこと困難、しかし始めは大した隔りがなかつたはずにかかわらず、段々幅が拡大されてくるから最初が大切。

近頃、自治体が観光事業に深入りして業者と見分けがつかぬくらいに入り交つてしまふのは醜態、「黒四ダム」を含めて立山、剣の景観が世界的な価値があつたとオリエンピックまでに自家用車を通らせることが優先の事業だとは全然合点が行かぬ、現に台風あとの騒ぎを見よ。

同志先輩がどんどんヒマラヤで偉業を建て世界的水準にありとは言え、世の一般は登山に対する常識、ひいては大自然に対する親しみ、生活とのバランスのとれた教養と鍛練とそして義務や責任等々……、これが先決であるまいか。

時に産業開発に伴う山岳の破壊は我慢もなろうが、観光に任せた損壊は一步も許せぬ。そもそも自然美を呼び物にして之を冒して何の観光ぞやだ。

登山と観光との摩擦は今後ますます激発しようが、会の責任の地位に立てば業者と異なるところを堂々と表明せねばならぬ。登山家は業者の施設、恩恵に浴することもあるが、いつも将来の見通しとしては国民、なかんづく青年の健全性を顧慮せねばならぬ。乗物か

た。同氏は私より実に七回の先輩である(七十才)吉川良平氏(金沢支部長池田氏と親友)と共に四十年の友であるが、その勇氣というか若々しさというか深く敬意を表する。
(三六、九、二四)

横須賀市 国見利夫

新年茶話会の最後に、「少くともJACからだけは遭難者を出さないようにしよう」と折井理事から話があり、出席者一同賛意を表したわけですが、これは更に一步を進め遭難を未然に防ぐ具体的な対策について考えるべきではないでしょうか。

事は会の在り方の問題になるが現在が海外登山と技術指導の面で大いに活躍しているにしても、これらはいずれも上部のみの動きとして終つており、一般会員にとっては会は単なる懇親だけの会となつてゐる。

そこで、この際技術の相互研究部門を設け、有志だけでもよいから、研究山行やその他室内研究をやつたらどうでしょう。その結果は、会員の技術向上だけでなく、それぞれの会員が所属している山岳団体にまでしんとし、現在会のやつてゐる高校登山講習会、登山技術指導者講習会と共に、山岳界の技術向上、遭難防止に役立つのではないのでしょうか。
(三七、三、一〇)

寄贈図書(和書)

36年7月~12月

7/5	私たちの山登り	山登り全集I	岩と雪
8/29	世界山岳全図	旅杖岳カ	
10/10	山岳全図	萬ヶ岳	
10/13	山岳全図	萬ヶ岳	
12/9	山の気象	第1集	
12/26	原始境から文明境へ	吉阪 隆正	

雑誌(和書) 合本

岩と雪 No.1'2,3 山と溪谷社

No. 4,5	山と溪谷社
No. 6,7	山と溪谷社
Vol. 147~152	(1960・7~12)
No. 1~9	山と溪谷社
No. 279~285	(1960・1~6)
No. 286~291	(1960・7~12)
No. 292~297	(1961・1~6)
No. 29~34	(1960・7~12)
No. 35~40	(1961・1~6)
No. 242~244	(1959・7~9)
No. 245~247	(1959・10~12)
No. 248~250	(1960・1~3)
No. 251~253	(1960・4~6)
No. 255~257	(1960・7~9)
No. 258~261	(1960・10~12)
No. 262~267	(1961・1~6)

(係 大橋 晋)

(二一九号訂正)

木暮理太郎の歌・訂正

前号掲載の「にひばり」転載の木暮先生の歌に誤りがありましたから、次の通り訂正します。(一) 内訂正。

△六頁中段▽

真屋だに日の影さぬ溪あひの雪降の
あとの草の芽たちよ(雪解)

△同 下段▽

越路なる法師の湯より熊とれつ葉ぞ食
せと肉送り来る(来ぬ)

△七頁上段▽

陽のさせば谷のなか空群れて飛ぶ蜻蛉
の翅のまなく光れり(光れる)

△同 下段▽

腹痛ひて手がかり探す岨崖に小岩松の
花咲ける見ゆ(咲けり見ゆ)

△同 下段▽

舟底をかたむしごと逆落とすこの荒
岩の岩ねむし(岩ねむし)

△七頁下段▽

栃木の宿の風呂場の窓見ゆる甲武信ヶ
岳は夕曇りせり(窓見ゆる)

△同 下段▽

山とよ雪崩の音も今日あたり名残と
思ふ峽に入り行く(名残り)

△次歌三首は重出のため一方を削除して下さい▽

△七頁二段▽

破風小屋
☆水汲みて友はかへらむ火を焚くとた
けど燃えなくぬれ木ぬれ土間

△同 三段▽

☆西破風の小屋にねざめて鳴り騒ぐ笹
の音聞けばうら淋しかり

△同 三段▽

四月、三國山に遊ぶ
☆山の上に吾ひとり居る静けさの時へ
にければ雪崩はきこゆ

オスカー・ハウス
トンとチャールズ
・ハウストン
1頁2段 十月の二
十六×に
3段 肺炎
十月の二十
六日に
肺炎
Himalayan Journal
11頁2段 ジャム
ジャム

計報

溝口岳人氏(会員番号四九一八)

大分県大分郡湯布院町川上湯の
坪

昭和三十六年十二月二十三日逝
去

栗津寿八朗氏(会員番号四四六五)

熊本市新鳥町一九

昭和三十七年三月二日逝去

喜多 要氏(会員番号八二二)

奈良県大和郡山部南町三
四

編集後記

会報の発行が隔月であるのと、頁数の制約とで掲載のほど遅れる原稿があつて弱っています。なにしろ紅葉のころの話を新緑の今ごろになつて読んでいただくようなものもある始末で困つたものです。速報という点では、これでは何の役にも立ちません。

昭和三十七年四月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円

電話神田(局)八九五二番
振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂